

近代沖縄における録音メディアの導入

- ニットーレコード制作の八重山民謡SP盤を対象として -

高橋美樹

はじめに

沖縄音楽に関するレコード録音の歴史は、まもなく100年を迎えようとしている。現在、新聞などで確認できる最も古いレコードは、1915（大正4）年に那覇市森楽器店内・琉球音楽奨励会主催による琉球古典音楽の録音である。『琉球新報』¹には同年8月に実施された録音の様子や完成したレコードの到着、レコードの宣伝広告まで、数回に亘る詳細な記事が残されている。さらに、それらの記事では金武良仁^{きんりょうじん}、伊差川世瑞^{いさがせいずい}など錚々たる演奏家がこの録音に関わっていたことが確認できる。初録音の記事を扱った紙面の大きさや緻密な資料をみると、大正4年に沖縄で初めて実施された録音メディアに対する注目度の高さがうかがえる。

これまで筆者は、近代沖縄における録音文化史について研究を進めてきた。1927（昭和2）年に大阪で設立された沖縄音楽専門レーベル・丸福レコード²について、さらに1934（昭和9）年に大手メジャーの日本コロムビアレコード（以下、日本コロムビア）が制作した沖縄音楽レコード集³について、主に媒介となる人物を中心にその実態をひも解いてきた。しかし、この2つの研究を進める過程で、大阪のニットーレコード（日東蓄音器株式会社）が制作した八重山民謡レコードの存在が明らかになった。石垣市立八重山博物館と沖縄県公文書館に計30枚以上のニットーレコードのSP盤が寄託・寄贈されていたのである。だが、この貴重な八重山民謡の録音史料の存在を知る者は極めて少ない。

そこで、本稿第1の目的は、ニットーレコード制作の八重山民謡レコードを近代の新たな録音史料として紹介することである。現存するレコード盤やレコード音源を比較・照合することで、浮かび上がった点を記述する。第2の目的は近代日本のレコード産業やニットーレコードの活動状況を辿り、近代沖縄の録音文化史における八重山民謡レコードの位置付けを試みることである。新たな録音史料

が沖縄と八重山で発見され、それらの実態を明らかにすることによって、沖縄に録音メディアが導入された初期の状況を推察できるのである。

1 八重山民謡レコードの実態

1 ではニッソーレコードが制作した八重山民謡のSPレコードについて概観する。SPレコードとは1分間に78回転し、後に「LP (long playing) が出現して以来、standard playingまたはshort playingと区別してよばれるようになったもの」⁴である。

石垣市立八重山博物館（以下、八重山博物館）には14枚のSPレコードが寄贈されており、その中で、ニッソーレコードは12枚であった。寄贈者や寄贈された期日は不明である。同館では、石垣市教育委員会文化課に寄贈されたニッソーレコード1枚も確認することができた。

沖縄県公文書館（以下、県公文書館）には富川英子氏⁵が寄託したSPレコード22枚のうち、18枚がニッソーレコードであった。同館には松竹章雄氏⁶が寄託した2枚のニッソーレコードも所蔵されていた。

八重山博物館所蔵のレコード13枚に関しては表1を、県公文書館所蔵のレコード20枚に関しては表2を参照されたい。

1.1 レーベルの活字情報の整理

レコード盤の中央に貼られたラベル・シートを「レーベル」と呼ぶ。レーベルには発行（発売）元のレコード会社、商標、ジャンル名、曲名、歌手・演奏者、レコード番号、発行年などが記載されている。表1と表2は、レーベルの記載情報をもとに図表化したものである。岡田則夫は「レーベルは書籍でいえば奥付にあたり、レコードの内容を知る手掛かりとして重要なものである」（岡田1991.3:98）と述べている。1.1では本稿で取り上げるニッソーレコード33枚について、レーベルの情報を整理する。

1.1.1 ジャンル名・歌手名とプレス製造

ジャンル名については、「民謡」と「八重山民謡」の2種類がみられる。ジャンル名の違いは、レコードがプレス製造された時期が異なることを示している。

曲目に関しては、現在も八重山諸島で歌い継がれている民謡のレパートリーが選曲されている。表1と表2を照らし合わせると同名の曲（同じレコード盤）があることに気づく。両館共に所蔵されているレコード盤の曲目を1曲として数えると、合計56曲が録音されている。しかし、この曲数は両館に寄贈・寄託されたものを数えたにすぎない。この他に散失したレコードがあるとすると、実際にはこれより多くのレコードが制作されていたと考えられる。

次に、両館に所蔵されているレコード盤について分析する。両館共に所蔵されているレコードは①～⑩の10枚である。ジャンル名は10枚全てが「民謡」である。また、10枚中6枚のレーベルに「松辨嘉武多」と記載されている。しかし、正しい歌手名は「松竹嘉武多」である。何らかの理由によって「竹」が「辨」と間違って印字されたのだろう。だが、この間違っただけの歌手名の印字により、①～⑩のレコードのプレス製造は同じ時期であると推察できる。

表1 ニットーレコードのレーベル情報 石垣市立八重山博物館所蔵
（作成：高橋美樹）

NO	種類	ジャンル	曲名	歌手・演奏者	発売元	色
1	①	民謡	岩崎節・川良山節	喜舎場孫知・仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
2		民謡	とばま節	松辨嘉武多・仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
3	(I)	民謡	仲筋ぬべーま節	松辨嘉武多・仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
4		民謡	蔵の花節	喜舎場孫知	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
5	②	民謡	木の花節・波照間節	仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
6		民謡	あがろふぎ節	仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
7	③	民謡	鳩間節・千鳥節	仲本マサ子・松辨嘉武多	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
8		民謡	崎山節・新村節	松辨嘉武多・仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
9	④	民謡	首里子ゆんた	喜舎場孫知・仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
10		民謡	興那覇節	松辨嘉武多・仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
11	(II)	民謡	ちようが節・しびら花節	仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
12		民謡	クッチャ節(ピアノ)	仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
13	⑤	民謡	白保節・しんだすり節	仲本政子・松辨嘉武多	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
14		民謡	種取節	松辨嘉武多・仲本政子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
15	⑥	民謡	大原越地節	松辨嘉武多・仲本政子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
16		民謡	古見ノ浦節・橋ゆば節	松辨嘉武多・仲本政子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
17	⑦	民謡	赤馬節・シュウラ節	喜舎場孫知・仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
18		民謡	安里屋節	仲本政子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
19	⑧	民謡	猫ゆんた・マミドー・ムンタ	喜舎場孫知・仲本政子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
20		民謡	久高節・トバタ松節	松辨嘉武多・仲本政子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶

21	⑨	民謡	諸見里節	仲本政子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
22		民謡	眞南風らつゆんた	仲本政子・松辨嘉武多	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
23	⑩	民謡	月夜濱節	喜舎場孫知	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
24		民謡	崎山ゆんた	仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
25	(A)	八重山民謡	あがろふざ節	仲本政子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
26		八重山民謡	仲筋ぬべーま節	松竹嘉武多・仲本政子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶

※①～⑩は沖縄県公文書館に所蔵されているものと同じレコード盤である。よって、共通の番号を付した。

※(I)(II)は石垣市立八重山博物館のみに所蔵されているレコードである。

※(A)は石垣市教育委員会文化課に寄贈され、現在八重山博物館に所蔵されているレコードである。

表2 ニットーレコードのレーベル情報 沖縄県公文書館所蔵

(作成：高橋美樹)

NO	種類	ジャンル	曲名	歌手・演奏者	発売元	色
1		民謡	鶯の鳥節	喜舎場孫知	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
2		民謡	アカマタ節	松辨嘉武多・仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
3	④	民謡	首里子ゆんた	喜舎場孫知・仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
4		民謡	與那覇節	松辨嘉武多・仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
5	⑩	民謡	月夜濱節	喜舎場孫知	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
6		民謡	崎山ゆんた	仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
7		民謡	揚古見ノ浦節	喜舎場孫知	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
8		民謡	亀久畑節・ちんだら節	仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
9	⑧	民謡	猫ゆんた・マミドマゆんた	喜舎場孫知・仲本政子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
10		民謡	久高節・トバタ松節	松辨嘉武多・仲本政子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
11		民謡	月の眞昼間節	喜舎場孫知・仲本政子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
12		民謡	舟越屋節・親廻節	喜舎場孫知・仲本政子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
13		民謡	弥勒節・ヤラーヨー	喜舎場孫知・仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
14		民謡	後桃原節	仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
15	⑦	民謡	赤馬節・シュウラ節	喜舎場孫知・仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
16		民謡	安里屋節	仲本政子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
17		民謡	ジラバ・ふさぎ野ゆんた	喜舎場孫知・仲本政子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
18		民謡	安里屋ゆんた	仲本政子・松辨嘉武多	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
19		民謡	たらくじ節・まざがい節	喜舎場孫知・仲本政子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
20		民謡	与那国シヨンガネー節	松辨嘉武多・仲本政子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
21	①	民謡	岩崎節・川良山節	喜舎場孫知・仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
22		民謡	とばるま節	松辨嘉武多・仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
23	②	民謡	木の花節・波照間節	仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
24		民謡	あがろふざ節	仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
25	⑨	民謡	諸見里節	仲本政子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
26		民謡	眞南風らつゆんた	仲本政子・松辨嘉武多	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶

27		民謡	なかなん節	仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
28		民謡	小濱節	松辨嘉武多・仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
29		民謡	子守歌(ピアノ)	仲本政子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
30		民謡	高那節	松辨嘉武多	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
31	⑤	民謡	白保節・しんだすり節	仲本政子・松辨嘉武多	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
32		民謡	種取節	松辨嘉武多・仲本政子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
33	③	民謡	鳩間節・千鳥節	仲本マサ子・松辨嘉武多	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
34		民謡	崎山節・新村節	松辨嘉武多・仲本マサ子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
35	⑥	民謡	大原越地節	松辨嘉武多・仲本政子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
36		民謡	古見ノ浦節・橋ゆば節	松辨嘉武多・仲本政子	日本・大阪・日東蓄音器株式会社	茶
37		民謡	月の真昼間節	喜舎場孫知・仲本政子	日東蓄音器株式会社	*紫
38		八重山民謡	とばるま節	松竹嘉武多・仲本政子	日東蓄音器株式会社	*紫
39		民謡	赤馬節・シュウラ節	喜舎場孫知・仲本マサ子	日東蓄音器株式会社	*紫
40		八重山民謡	種取節	松竹嘉武多・仲本政子	日東蓄音器株式会社	*紫

※①～⑩は石垣市立八重山博物館に所蔵されているものと同じレコード盤である。よって、共通の番号を付した。

また、八重山博物館のみに所蔵されているのは(Ⅰ)と(Ⅱ)の2枚である。(Ⅱ)のレーベルには《クッチャ節(ピアノ)》と記されており、当時大変貴重な西洋楽器であるピアノ伴奏によって歌われている。

レコード(A)には、「八重山民謡」《あがるふざ節》仲本政子/「八重山民謡」《仲筋ぬべーま節》松竹嘉武多・仲本政子、と記載されている。ジャンル名が「八重山民謡」と記載され、①～⑩の「民謡」とは異なる。さらに、《仲筋ぬべーま節》の歌手名も「松辨嘉武多」ではなく、「松竹嘉武多」と正しく記されている。

また、《あがるふざ節》に関して、レコード(A)のレーベルには「仲本政子」、両館に所蔵される②のレーベルには「仲本マサ子」の名が刻まれている。《仲筋ぬべーま節》については、八重山博物館(Ⅰ)のレーベルに「松辨嘉武多・仲本マサ子」と記載されている。

つまり、(A)は①～⑩と(Ⅰ)より新しいレコード盤であることが予想される。その理由として、ジャンル名が「民謡」から「八重山民謡」に変更されている。歌手名が「仲本マサ子」から「仲本政子」へと、カタカナ表記から漢字表記に変わっている。重要な点は「松辨嘉武多」が「松竹嘉武多」と、名字の表記が修正されていることである。これらジャンル名と歌手名の表記の相違・修正によって、

レコード(A)は①～⑩とI)より後にプレス製造されたものであると推察できる。

図1 茶色のレーベル 「民謡」《仲筋ぬべーま節》松辨嘉武多・仲本マサ子
石垣市立八重山博物館所蔵



図2 茶色のレーベル

「八重山民謡」《仲筋ぬべーま節》松竹嘉武多・仲本政子
石垣市立八重山博物館所蔵



また、県公文書館のみに所蔵されているレコードは10枚ある。そのうち8枚は茶色のレーベルであり、残り2枚は紫色のレーベルである。紫色のレーベルのレコード盤は、ジャンル名が表面「民謡」裏面「八重山民謡」と、両面で異なっている。この理由として、以前にプレスした2枚のレコードの片面ずつを選び、1枚のレコードとして新たにプレスしたことが予想される。さらに、茶色と紫色というレーベル色が違うレコードの存在は、プレス製造の時期が両者で隔たっていることを示している。そして、表裏に異なるジャンル名が記された紫色のレーベ

ルの方が、同一ジャンル名の茶色のレーベルよりもプレスの方が遅いと推測できる。

図3 紫色のレーベル 「民謡」《月の真昼間節》喜舎場孫知・仲本政子
沖縄県公文書館所蔵



図4 紫色のレーベル 「八重山民謡」《とばるま節》松竹嘉武多・仲本政子
沖縄県公文書館所蔵



1.1.2 西洋楽器による伴奏

表2のNO.29には《子守歌（ピアノ）》仲本政子、と記載されたレコードがあり、先述の《クッチャ節（ピアノ）》も仲本マサ子による歌唱であった。筆者の管見の限り、明治から大正期に琉球古典音楽を録音したものの中には、洋楽器で伴奏した楽曲は見当たらず、歌い手の中に女性は含まれていなかった。よって、八重山民謡を西洋楽器のピアノ伴奏で歌いレコーディングした女性は、仲本政子（マサ子）が初めてである可能性が高い。

1.1.3 レコード番号と録音時期

一般的にレーベルには曲名や歌手名の他に、レコード番号や発行年が記載されている。しかし、残念ながら本稿で扱ったレコードのレーベル全てにレコード番号と発行年が印字されていなかった。(図1～図4参照)レコード蒐集家の岡田は「発行年月日は、特別なものを除いて記載されていない。これは、レコード業界の昔からの慣習であった」(岡田1991.3:99)と、述べている。岡田の見解によると、ニッソーレコードのレーベルに発行年月日が記されていないのはレコード業界の慣習に従っており、何ら不思議はないと捉えられる。もちろん、これはSPレコードに関する慣習であって、戦後EPレコードやLPレコードが誕生した以降はレコード産業の発展により、発行年の記載が一般的になった。

では、なぜレコード番号が印字されていないのだろうか。これが、八重山民謡レコードに関する疑問の第1点目である。ニッソーレコードは設立の翌年1921年から1930年代半ばまで、新譜案内やレコード目録を盛り込んだ機関誌『ニッソータイムス』を発行していた。さらに、1934年には『ニッソーレコード総目録』を刊行し、1935年にタイハイレコードと合併するまでのレコード情報を網羅していた。入手できた『ニッソータイムス』と『ニッソーレコード総目録』を調査したが、八重山民謡のレコードに関する記録はどこにも見当たらなかった。ニッソーレコードではほぼ毎月『ニッソータイムス』を発行していたため、レコード番号が明らかになれば発売年も判明する。しかし、実際に得られたのは、現存するレコード盤のレーベル情報のみであり、ニッソーレコード発行による活字メディアからは何の情報も得られなかった。

そこで沖縄音楽や芸能に関する文献や新聞記事を調査したところ、2件の関連記述をみつけることができた。

1件目は『沖縄タイムス』の記事「大正期に民謡録音 小浜出身の松竹加武多さん 亡き父の歌声に章雄さんうっとり」(1999年11月19日)である。松竹加武多の息子・章雄氏が八重山民謡のレコード2枚を発見し、蓄音器のある沖縄県南風原文化センターで約40年ぶりに父の歌声を聴き感激した、という内容である。記事の中で、章雄氏は「私の生まれた年に録音したと(筆者注:父が)話していた」と述べている。章雄氏の誕生年は大正15年(1926)であり、章雄氏の記憶を手掛かりとするならば、八重山民謡のレコードは大正15年に録音された可能性が

高い。

関連記述の2件目は大田静男著『八重山の芸能』である。「八重山芸能家列伝」の中で喜舎場孫知が紹介され、「大正15年（1926）ニッソーレコードに仲本政子、松竹嘉武多と八重山民謡を初めて吹込む」と記されている。筆者がこの録音年の根拠について、大田氏に質問した際⁸「レコードを吹込んだ大正15年（1926）については、仲本政子氏の遺族の談話によるもの」と、御教示いただいた。

大田氏が記した大正15年という録音時期は、仲本政子の遺族の記憶によるものである。さらに、松竹加武多の遺族の章雄氏も同様に、大正15年に録音したという父の談話を記憶している。レーベルにレコード番号の記載がなく、ニッソーレコードの目録にも掲載されていない状況では、録音年を確認する手だてがない。本稿では2人の歌い手の遺族の記憶に拠るものという前提で、録音年を大正15年としたい。

1.2 岡田則夫によるニッソーレコードのレーベルの分類

岡田則夫は雑誌『レコード・コレクターズ』に連載「続・蒐集奇談」を執筆し、SPレコード蒐集家としての研究成果を披露している。連載「第13回 続・蒐集奇談」（1991年10月号）ではニッソーレコードの活動を取り上げ、多種多様なレーベルを色やデザインなどのタイプ別に分類している。レーベルに記された①発行会社名、②発行会社所在地、③商標・商標名、④レコード番号、⑤種目（ジャンル）名、⑥演者（歌手）名、⑦演目（曲目）、⑧その他（年月日・特記事項など）をもとに、その傾向と特徴を整理した。以下は、岡田による分類（岡田1991.10:93-94）から抜粋したものである。なお、ゴチック文字は八重山民謡レコードに関係ある記述である。

ニッソー旧吹き込み盤のレーベル

主要レーベルは、特黒、特赤、黒、赤、紫の5種。色によって値段が分けられていた。...中略...レコード番号は、1番からの連番。発売もほぼ番号順なので、番号が若いほうが古い録音と考えてよいだろう。

旧吹き込み（ラッパ吹き込み）のレーベル（大正9～昭和3年）

〔タイプ1-a〕通称「赤」。赤地に金文字。商標は白抜き。1枚1円40銭。ニットの基本レーベル。下部に「日本・大阪・日東蓄音器株式会社製」。

〔タイプ1-b〕通称「赤」。朱色に近い赤。ツバメのマークが1-aと違う。下部に「大日本 日東蓄音器株式会社製」。

〔タイプ2〕通称「特赤」。赤地に金文字。白抜き文字なし。語学レコード専用レーベル。

〔タイプ3〕通称「黒」。デザインは、タイプ1に同じ。

〔タイプ4〕通称「特黒」。黒地に金文字。白抜き文字なし。1枚2円50銭の高級盤。

〔タイプ5〕通称「紫」。紫地に金文字。白抜き文字あり。1枚80銭の廉価盤。大正14年12月から発売。

〔タイプ6〕「紫」の後期のタイプ。白抜き文字なし。電気吹き込み盤もあり。

〔タイプ7〕茶色地に金文字。デザインはタイプ4に同じ。プライベート盤のレーベルに使用

〔タイプ8〕～〔タイプ11〕は省略。

電気吹き込みのレーベル

〔タイプ12〕通称「新黒」。黒地に金文字。商標名が直線書きのデザインとなる。基本レーベル。1枚1円。次のタイプ13、14は同デザイン。

〔タイプ13〕通称「新赤」。赤地に金文字。1枚1円20銭。

〔タイプ14〕通称「新青」。青地に金文字。1枚1円50銭。

〔タイプ15〕通称「紺青」。紫地に金文字。デザインはタイプ12に同じ。

〔タイプ16〕黒地に金文字。日東後期のレーベル。このデザインは大日本蓄のニットー大衆盤に継承される。

1.3 レーベル情報との照合

岡田によるレーベルのタイプ別分類と八重山博物館、県公文書館に所蔵されるニットーレコードのレーベル情報を照合させた。さらに、1.1の結果も合わせて、(1)レーベルのタイプ、(2)ジャンル名、(3)歌手・演奏家の表記、(4)楽曲数、(5)レコード枚数、(6)その他、について再考した。その結果、【初回録音】【再

プレス1回目】【再プレス2回目】というレコード製造の変遷を導き出すことができた。

1.3.1 初回録音 1926（大正15）年

(1) レーベルのタイプ：レーベルの色は茶色地に金文字であり、岡田の〔タイプ7〕に該当する。〔タイプ7〕は「プライベート盤のレーベルに使用」されたデザインであることから、所蔵されるレコードは商業目的で制作されたものではないと推測される。製作は「日本・大阪・日東蓄音器株式会社」と記載され、国・都道府県・会社名が記されている〔タイプ1-a〕に該当する。

(2) ジャンル名：「民謡」と記載されている。

(3) 歌手・演奏者の表記：以下7種類の記載がみられた。歌手3名の中で、表記が異なるのは「仲本マサ子」「仲本政子」のみであった。

「松辨嘉武多・仲本マサ子」「松辨嘉武多・仲本政子」「喜舎場孫知・仲本マサ子」
「松辨嘉武多」「仲本政子」「仲本マサ子」「喜舎場孫知」

(4) 楽曲数：曲名は56曲を数える。

(5) レコード枚数：両館所蔵の①～⑩、(ⅠⅩⅡ)を含む20枚(56曲)である。

(6) その他：ピアノ伴奏によるものが《子守歌》《クッチャ節》の2曲含まれており、歌手は「仲本政子(マサ子)」であった。

1.3.2 再プレス1回目 1927（昭和2）年～1928（昭和3）年5月頃

(1) レーベルのタイプ：レーベル色は初回録音時と同様で、茶色地に金文字である。製作は「日本・大阪・日東蓄音器株式会社」と記され、変更はない。

(2) ジャンル名：「八重山民謡」と記載された。初回録音時の「民謡」に地域名の「八重山」を加え、どこの地域の民謡であるかを特定している。

(3) 歌手・演奏者の表記：以下の2種類がみられた。初回録音時に間違えて印字された「松辨嘉武多」の「辨」の文字が、「竹」に修正されている。

「松竹嘉武多・仲本政子」 「仲本政子」

(4) 楽曲数：曲名は《あがるふざ節》《仲筋ぬべーま節》の2曲である。両曲共、初回にも録音されているが、初回と再プレス1回目では以下のように、レーベルの表記が異なっている。

【初回録音】表1表2② 民謡《あがるふざ節》仲本マサ子

表1(I) 民謡《仲筋ぬべーま節》

松辨嘉武多・仲本マサ子

【再プレス1回目】表1(A) 八重山民謡《あがるふざ節》仲本政子

表1(A) 八重山民謡《仲筋ぬべーま節》

松竹嘉武多・仲本政子

(5) レコード枚数：八重山博物館所蔵のレコード(A) 1枚(2曲)である。

1.3.3 再プレス2回目 1928(昭和3年)7月~1935(昭和10)年10月

(1) レーベルのタイプ：レーベルの色は紫地である。製作は国と府名が消えて、「日東蓄音器株式会社」となった。

(2) ジャンル名：「民謡」と「八重山民謡」の2種類が見られる。

(3) 歌手・演奏者の表記：下記の3種類の記載が見られた。表記が異なるのは「仲本マサ子」「仲本政子」の1人である。

「喜舎場孫知・仲本マサ子」「喜舎場孫知・仲本政子」「松竹嘉武多・仲本政子」

(4) 楽曲数：5曲である。曲名に(2)(3)を含めると以下ようになる。レーベルに特に記載はないが、便宜上、表面、裏面と記した。

表2 NO.37 表面：民謡《月の真昼間節》 喜舎場孫知・仲本政子

表2 NO.38 裏面：八重山民謡《とばるま節》 松竹嘉武多・仲本政子

表2 NO.39 表面：民謡《赤馬節・シュウラ節》 喜舎場孫知・仲本マサ子

表2 NO.40 裏面：八重山民謡《種取節》 松竹嘉武多・仲本政子

(5) レコード枚数：県公文書館所蔵NO.37~40の2枚(5曲)である。

(6) その他：レーベルには「ELECTRIC RECORDING」と印字されている。だが、初回到録音した旧吹き込み(ラッパ吹き込み)のレコードを廃盤にし、マイクロフォンを使用した電気吹き込み¹⁰によって再録音したとは考えにくい。さらに、上記5曲は旧吹き込みレコードも電気吹き込みレコードも演奏(録音)時間は同じであった。

ニットーレコードの電気吹き込みは、1928(昭和3)年7月以降に実施されている。しかし、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターの報告書には、ニット

ーレコードの「旧吹き込みは80回転、電気吹き込みは3500番台より電気吹き込み78回転となる。紺、エンジ、黒サーブス盤で、旧原盤混入している」¹¹と記されている。つまり、電気吹き込みと記載されたレコードの中にも、旧吹き込みの原盤が混じっているのである。よって、2枚のレコードには「ELECTRIC RECORDING」と印字されているが、実際のレコードは旧吹き込み原盤を再プレスしたものであると推測される。

2 八重山民謡のレコード音源の特徴

県公文書館所蔵のニットーレコードはSP音源をCDに復刻させている。2ではそのCDから富川英子氏が寄託した18枚の音源について、使用楽器や歌唱スタイルなどの特徴を考察する。表3はレコード音源をCD化した全40トラック（50曲）を整理したものである。

伴奏楽器としては46曲が三線を使用しており、全体の92%を占めている。《崎山ゆんた》《子守歌》の2曲は、ピアノ伴奏による女声の独唱であった。《子守歌》と称している歌は音源を聴くと、八重山民謡の代表曲《月の美しや》である。前奏、間奏、後奏はピアノがオクターブで歌のメロディーを演奏しているが、オクターブの連続は技巧的に拙い印象を受けた。歌の部分は、基本的に女声の歌にピアノが合わせて演奏している。

《ジラバ》《ふさぎ野ゆんた》の2曲は無伴奏で歌っている。元来「ジラバ」と「ゆんた（ユンタ）」は八重山諸島に伝わる歌謡の一形態である。ジラバは農耕祭儀や旅祈願、家屋の落成祝いなど諸祭儀の場で謡われる祭式歌謡であるとともに、農耕や労働の場でも謡われる作業歌である¹²。ユンタは「豊年祭や新築祝いなど、祭りや祝儀の場でも謡われるが、日常の作業労働の場で謡われることのほうが多い」¹³。ジラバ、ユンタ共に集団で歌われるのが一般的である。さらに、農耕や労働の場では楽器など持ち得ないのが普通である。よって、《ジラバ》《ふさぎ野ゆんた》は日常的な歌唱スタイルと同様に、無伴奏で録音したといえる。

歌唱スタイルについては男声独唱、女声独唱、男声独唱（女声掛け声）、女声独唱（男声掛け声）、男女の合唱（ユニゾン）、男女の掛け合い交互唱などが挙げられる。男女の掛け合い交互唱とは、曲の一節ごとに男女が交代して歌うスタイル

ルなどを指す。CD音源50曲を分類すると、以下のような結果となった。

男声独唱：7曲　女声独唱：18曲　男声独唱+女声独唱：1曲
男声独唱（女声掛け声）：3曲　女声独唱（男声掛け声）：2曲
男声独唱（女声掛け声）+女声独唱（男声掛け声）：4曲
男声独唱（女声掛け声）+女声独唱（男声掛け声）の交互唱：6曲
男声独唱・女声独唱の交互唱：5曲　男女の掛け合い交互唱：2曲
男女の合唱（ユニゾン）：2曲

女声独唱と女声独唱（男声掛け声）を合わせると20曲もあり、全体の40%を占めている。ピアノ伴奏による2曲も女声独唱であったことから、仲本のレパートリーの多さと音楽表現上の柔軟さがうかがわれる。また、スタイルが異なる3種類の男女の交互唱を合計すると13曲になり、全体の26%を占める。ユンタ、ジラバはもとより、節歌にも男女の交互唱が浸透している点は、八重山諸島の歌唱スタイルの特徴を顕著に表している。

次に、歌い手の声や発声に関して、その傾向を述べる。

仲本政子の歌声は、《亀久畑節》《ちんだら節》などを始め、中音域の声が非常に安定しており、力を抜いて発声している印象を受けた。また、《あがるふざ節》では中音域から高音域への声の移り変わりが、鮮やかに行なわれている。《なかなん節》では、高音の張りのある声を持続させながら歌っている。《安里屋節》《安里屋ユンタ》は高い音域が続くせいか、非常に甲高い声に聴こえる。

なお《安里屋節》《安里屋ユンタ》の音源を聴く限り、この2曲は曲名が逆であると思われる¹⁴。《安里屋節》には「マタハーリヌ チンダラ」という古謡《安里屋ユンタ》特有のハヤシが歌われている。この点だけでも、曲名が異なる根拠となるだろう。

また、喜舎場孫知の歌声は低音域から中音域まで非常に安定感があり、高音域も歌声がよく響き、持続させている。

松竹嘉武多は幅広い音域に対応できる歌い手であり、《高那節》のように速いテンポの民謡も軽快に歌いこなしている。

表3 八重山民謡の音源の特徴 沖縄県公文書館所蔵 (作成:高橋美樹)

CD-Track	曲名	歌手・演奏者	楽器	歌唱スタイル	長さ J=
1	鶯の鳥節	喜舎場孫知	三線	男声独唱	72
2	アカマタ節	松辨嘉武多・仲本マサ子	三線	女声独唱	96
3	首里子ゆんた	喜舎場孫知・仲本マサ子	三線	男声独唱(女声掛け声)・女声独唱(男声掛け声)の交互唱	76
4	與那覇節	松辨嘉武多・仲本マサ子	三線	男声独唱(女声掛け声)・女声独唱(男声掛け声)の交互唱	68
5	月夜濱節	喜舎場孫知	三線	男声独唱	56
6	崎山ゆんた	仲本マサ子	ピアノ	女声独唱	88
7	揚古見ノ浦節	喜舎場孫知	三線	男声独唱	102
8	亀久畑節・ちんだら節	仲本マサ子	三線	女声独唱・女声独唱	92・80
9	猫ゆんた	喜舎場孫知・仲本政子	三線	男声独唱(女声掛け声)・女声独唱(男声掛け声)合唱	94
10	マミドーマゆんた	喜舎場孫知・仲本政子	三線	女声独唱	98
11	久高節・トバタ松節	松辨嘉武多・仲本政子	三線	男声独唱・女声独唱の交互唱・合唱・女声独唱	100・98
12	月の眞昼間節	喜舎場孫知・仲本政子	三線	女声独唱と男声独唱	48
13	舟越屋節・親廻節	喜舎場孫知・仲本政子	三線	男声独唱・女声独唱	84・104
14	弥勒節・ヤラーヨー	喜舎場孫知・仲本マサ子	三線	男女の合唱(ユニゾン)・男女の合唱(ユニゾン)	88・94
15	後桃園節	仲本マサ子	三線	女声独唱(男声掛け声)	74
16	赤馬節・シェウラ節	喜舎場孫知・仲本マサ子	三線	男声独唱(女声掛け声)・女声独唱	74・92
17	安里屋節	仲本政子	三線	女声独唱(男声掛け声)・男声独唱(女声掛け声)の交互唱	92
18	ジラバ・ふさぎ野ゆんた	喜舎場孫知・仲本政子	なし	男女の掛け合い交互唱・男女の掛け合い交互唱	92
19	安里屋ゆんた	仲本政子・松辨嘉武多	三線	女声独唱	78
20	たらくじ節・まざがい節	喜舎場孫知・仲本政子	三線	男声独唱・女声独唱	56・84
21	与那国シヨングナー節	松辨嘉武多・仲本政子	三線	男声独唱(女声掛け声)・女声独唱(男声掛け声)	52
22	岩崎節・川良山節	喜舎場孫知・仲本マサ子	三線	男声独唱・女声独唱	84・96
23	とばるま節	松辨嘉武多・仲本マサ子	三線	男声独唱(女声掛け声)・女声独唱(男声掛け声)の交互唱	54
24	波照間節	仲本マサ子	三線	女声独唱	98
25	木の花節	仲本マサ子	三線	女声独唱	88
26	あがろふざ節	仲本マサ子	三線	女声独唱	84
27	諸見里節	仲本政子	三線	女声独唱	98
28	眞南風らつゆんた	仲本政子・松辨嘉武多	三線	女声独唱(男声掛け声)・男声独唱(女声掛け声)の交互唱	76
29	なかなん節	仲本マサ子	三線	女声独唱	78
30	小濱節	松辨嘉武多・仲本マサ子	三線	男声独唱(女声掛け声)・女声独唱(男声掛け声)	64
31	子守歌(ピアノ)	仲本政子	ピアノ	女声独唱	98
32	高那節	松辨嘉武多	三線	男声独唱	124
33	白保節・しんだすり節	仲本政子・松辨嘉武多	三線	女声独唱・男声独唱の交互唱・女声独唱	84・90
34	種取節	松辨嘉武多・仲本政子	三線	男声独唱(女声掛け声)・女声独唱(男声掛け声)の交互唱	76
35	鳩間節	仲本マサ子・松辨嘉武多	三線	男声独唱(女声掛け声)	76
36	千鳥節	仲本マサ子・松辨嘉武多	三線	女声独唱・男声独唱の交互唱	78
37	崎山節・新村節	松辨嘉武多・仲本マサ子	三線	男声独唱・女声独唱の交互唱・男声独唱・女声独唱の交互唱	84・86
38	大原越地節	松辨嘉武多・仲本政子	三線	男声独唱(女声掛け声)・女声独唱(男声掛け声)	72
39	古見ノ浦節	松辨嘉武多・仲本政子	三線	男声独唱(女声掛け声)	68
40	橋ゆば節	松辨嘉武多・仲本政子	三線	女声独唱(男声掛け声)	76

3 八重山民謡を録音した3人の歌い手

次に、八重山民謡を録音した3人の歌い手について紹介する。3人が歌い手として活躍していた大正から昭和初期は、現在より活字メディアが乏しい時代であった。そのため、文献資料から個々の経歴を知り得ることは困難を擁した。本節は、大田静男著『八重山の芸能』にその大部分を拠っている。

喜舎場孫知（きしゃば・そんち）

喜舎場孫知は1860（咸豊10）年12月11日、喜舎場永珣孫安の三男として石垣村で生まれる。安室流の祖とされる安室孫師に師事し、八重山絃歌を修練した。喜舎場英整の『八重山歌工四』を1921（大正10）年に訂正し編纂をなす。

昭和3年に日本青年館で開催された「八重山歌舞公演」の地謡責任者を担当する。岩崎卓爾を称えた『岩崎節』『真似節（あらかりぶし）』を作詞作曲している。後進の育成にも力を注ぎ、石垣喜保、喜舎場孫令、天久用立等が代表的な弟子である。1933（昭和8）年8月に逝去。（大田1993:164参照）

松竹嘉武多（まつたけ・かむた）

小浜島出身。息子の章雄氏によると、ニッソーレコードで八重山民謡を録音した当時、嘉武多は35歳であった。島の地謡を代表してレコーディングにのぞんだ。その後は「蓄音器アヤー（父）」として、島民に慕われたという。（沖縄タイムス1999.11.19:29参照）

仲本政子（なかもと・まさこ）

1885（明治18）年石垣村新川で生まれる。音楽環境にめぐまれ、また兄で作曲家である宮良長包の影響もあり、幼少より音楽や舞踊に親しんだ。豊かな声量と美声のゆえ、広くその名を知られる。大正末期にニッソーレコードにおいて八重山民謡を録音する。八重山で初めてレコードを吹き込んだため「チコーンキアッパ（蓄音器おばさん）」と呼ばれた。（大田1993:164参照）

1934（昭和9）年には喜舎場永珣に引率され、大浜津呂、崎山用能と共に、日本コロムビアで八重山民謡を録音した。政子の孫の談話¹⁵によると、戦後は石垣市で旅館「ちこんきーやー」を運営していた時期もあった。琉球舞踊をたしなみ、

高齢になっても踊りなどのパフォーマンスを好む女性であったという。

4 ニットーレコード設立と活動の変遷

4では、明治～大正時代に日本で設立されたレコード会社の変遷を辿り、ニットーレコードの活動について整理する。

4.1 近代日本のレコード業界

明治～大正期にかけて日本のレコード市場には、欧米のレコード会社（米国コロムビア、米国ビクターなど）が制作したレコード盤を輸入し、国内販売する天賞堂、三光堂などの楽器店が存在した。1907（明治40）年には東京銀座の十字屋楽器店が蓄音器部を設立し、ビクター洋楽レコードの販売契約が結ばれる。外国資本のレコード会社と国内販売店との契約によって、レコード市場が成立していた時代である。

1910（明治43）年には日本独自のレコード会社、日本蓄音器商會が設立された。1912（明治45）年日本蓄音器商會は日米蓄音器製造株式会社を合併し、「株式会社 日本蓄音器商會」を社名とする。「この日本蓄音器商會こそ明治末期に成立し大正時代を通じて日本のレコード産業の主導権をとり業界に君臨した」（菊池2003:80）レコード会社であった。日本蓄音器商會は「日本で生まれたレコードであり、資本も経営も欧米のメジャー・レコード会社とはまったく繋がりのない企業」（生明2007:2）であった。だが、「その資本は日本在住のアメリカ人によって保有され、それらのアメリカ人によって経営される会社だった」（生明2007:2）。つまり、アメリカ人に背後で支えられながら経営していたのが実情であり、日本蓄音器商會は純粋な国産レコード会社とは言い切れなかった。その他、全国各地では国産のマイナーレーベルとして、名古屋のツル印アサヒレコード、京都のオリエンツ・レコード、西宮の内外レコードなどが設立され、独自の商業展開を繰り広げていた。

4.2 ニットーレコードの誕生

ニットーレコードは1920（大正9）年3月20日に日東蓄音器株式会社として設立された。場所は事務所、工場とも現在の大阪市住吉区の住吉神社前にあった。

『ニットータイムス』1922年4月号の奥付には「発行所 大阪市外住吉神社南門
日東蓄音器株式会社編集部」と記され、設立当初の住所が確認できる。

「資本金は素封家白山善五郎氏（津守新田を開発した白山家の裔）…中略…森
下辰之助氏」（鈴木1980:129）が出資したという。初代社長の白山善五郎は『大
阪現代人名辞書』（大正2年発行）において、「代々資産家を以て知られ、現時所
得税1150余円を納む」と紹介されている。同辞書では善五郎本人も「資産家」に
位置付けられていた。ちなみに、ニットーレコード設立の翌年1921（大正10）年
に善五郎が納めた所得税は7527円¹⁶と高額であった。

同社専務の森下辰之助に関して、岡田は「優れたプロデューサーであり、また
経営者であった…中略…この人は、なかなかのアイデアマンでもあった」（岡田
1991.10:92）と評している。森下は後に、同社の社長に就任する。森下は上方の
伝統芸能、特に義太夫に造詣が深く、それらの保存のため数多くのレコードを制
作した人物として知られている。

1921（大正10）年下旬、ニットーレコードは「第1回新譜として47種のレコ
ードを発売した。初年度の製品には、豊竹古鞠太夫の『菅原』寺子屋の段や『忠
臣蔵』6段目の全段吹き込み」（倉田1992:108）の他に、浪花節、筑前琵琶など
が挙げられる。レーベルには燕（ツバメ）印の商標が描かれていた。

『ニットータイムス』1922年5月号には、新譜情報が大型活字で2ページに亘
り掲載されている。内容は新国劇「大菩薩峠」（沢田正二郎他）曾我廼家五郎劇
「百行の基」、常磐津「戻り橋」、箏曲「千鳥の曲」、浄瑠璃「堀川猿廻し」（豊竹
古鞠太夫他）など10点で、そのうち8点は4枚組、6枚組など連続物レコードと
して販売されていた。

ニットーレコードは「ほぼ5年目で2000点をこえるというハイペースで新譜を
生産し続けた」（渡辺2002:192）という。初めて新譜を発売した1921年から5年
目にあたる1926（大正15）年『ニットータイムス』6巻9号では、レコード総目
録が以下のジャンルによって紹介されている。

語学レコード

独奏（サクソホン、クラリネット、シロホン、バイオリン、セロ、
ピアノ、ハーモニカ及エンホンコン、コルネット、バラライカ、

マンドリン及リュート、ベル、フリユート)

オーケストラ 管楽及喇叭 独唱 合唱 唱歌 童話及童謡 三絃童謡
宝塚少女歌劇 児童劇及歌劇 映画劇及説明 合奏(例:ピアノ&三絃)
尺八及箏曲 筑前琵琶 薩摩琵琶 新内 歌澤 新地唄 清元
江戸小唄 長唄 常磐津 義太夫 歌舞伎 新派劇 喜劇
舞踊囃子 俚謡 端唄及小唄 落語 雑曲 万歳 浪花節
流行唄 宗教 謡曲 演説 講談

1926年の目録では、義太夫、俚謡、端唄、小唄、落語、浪花節のレパートリーが大部分を占めている。洋楽のジャンルは、独奏、オーケストラ、管楽及喇叭(音楽隊や軍楽隊が演奏)、独唱などをその範囲としているが、目録全体における割合は極めて少ない。やはり、全体的には白山や森下の趣向を活かして、日本の伝統芸能、歌いもの、語りものに重点が置かれている。

オーケストラの項目には、山田耕筰指揮による日本交響管絃団の演奏がある。『モリスダンス/かっぱれ』『炬火の踊り/お江戸日本橋』『太湖船』という3枚のレコードが制作されていた。渡辺裕によると、山田は自らの組織した日本交響管絃団の関西公演の折にニッソーレコードにその初録音を残し、その音源は1924年7月発売の『モリスダンス/かっぱれ』だという(渡辺2002:197-198)。

また、『ニッソータイムス』はほぼ月刊で発行され、新譜情報やレコード目録の他に、録音風景の写真や論説、同社主催による「日東演芸大会」のプログラムなどが盛り込まれていた。単なる広報機関誌というより、顧客と同社をつなぐコミュニケーション・ツールとして、顧客のニーズを把握する役割も果たしていた。なお、筆者の手元にあるのは、1921(大正10)年10月『日東タイムス』創刊号から1935(昭和10)年12月『ニッソータイムス』15巻2号までである。

さらに、『昭和9年度 ニッソーレコード総目録』¹⁷には、昭和9年当時の日東蓄音器株式会社と営業所、配給所の住所が記されている。日東蓄音器株式会社(大阪市住吉区)、大阪営業所(大阪市南区)、東京営業所(東京市京橋区)、九州営業所(福岡市)、名古屋営業所(名古屋市)、札幌配給所(札幌市)とある。大阪を拠点として、北海道から九州までの広範囲に4つの営業所と1つの配給所を設置し、販路を拡大しながら势力的に活動していたことがうかがえる。

また、ニッソーレコードは大阪「戎橋筋西川に戎屋という直売店」(鈴木1980:129)を持っていた。『写真集おおさか100年』には1924(大正13)年当時の戎橋の写真¹⁸が掲載されている。写真の右側には「ニッソーレコード ツバメ印レコード 戎屋蓄音器店」と書かれた大きな立体型の広告看板を確認することができる。戎橋は「心齋橋筋から今宮戎への参道として江戸時代から人通りが多かった」¹⁹。ニッソーレコードの大型の立体看板は、橋を往来する人々の目を大いに引いたことだろう。

さらに、新譜の宣伝広告も『朝日新聞』『読売新聞』など大手新聞社の紙面で大々的に展開されていた。ニッソーレコード設立まもない1924年の広告は、図5を参照されたい。図5には商標のツバメ印の下に、「純国産」とニッソー独自のキャッチフレーズを盛り込んでいる。ニッソーの広告の多くが「純国産」と銘打っており、外資系レコード会社の傘下にはないことを強調していた。

ニッソーレコードは『朝日新聞』に、1922年から1934年の13年間で合計240件の広告を掲載している。1922年1件、1923年7件、1924年6件、1925年13件、1926年5件、1927年10件、1928年19件、1929年16件、1930年20件、1931年42件、1932年29件、1933年30件、1934年42件の広告がみられる。広告件数では、1931(昭和6)年と1934(昭和9)が42件と最も多く、年間約8日に1回のペースで広告を載せていたことになる。しかし、タイハイレコードと合併した1935年以後になると、ニッソーとタイハイの両レーベルの新譜を紹介する内容へと、広告も様変わりし始める。

戦前の『朝日新聞』におけるニッソーレコード最後の単独広告は、1937(昭和12)年7月8日夕刊「ニッソー大衆盤」だと思われる。この広告には浪花節や落語、童謡、流行歌の曲目が名を連ね、「真価のあるレコードの特売発表!お中元の御進物として是非!」と銘打ち、1枚50銭の廉価で販売されていた。



図5 ニッポーレコード広告 『朝日新聞』1924（大正13）年11月25日

日本蓄音器商会（以下、日蓄）は1919（大正8）年にオリエント・レコードを買収合併し、1921（大正10）年には帝国蓄音器商会を傘下とする。その後も、三光堂や東京レコードが日蓄の傘下に入り買収されるなど、レコード業界で中央集権化の流れが急速に拡大していた。菊池清麿はレコード業界の主導権を握ろうとした日蓄の激しい画策について、次のようにまとめている。

日蓄はこのような力の商法でトラスト形成をすすめる過程でニッポーレコードに攻勢をかけた。大正11年4月、大阪市内の小売店でニッポーレコードの商品を扱う店には日蓄のレコードは供給しないという趣旨を申し渡すなど強硬な態度に出た。ところが、大阪蓄音器同業組合の反発を買い、京都や神戸を巻き込んだでの撤回要求に直面した。5月にはニッポーレコードの東京追放を画策したが、これも失敗に終わった。（菊池2003:80-81）

日蓄の激しい攻勢にあっても必死に抵抗し、経営を維持しようとする関西を中心としたレコード会社の意気込みが伝わってくる。しかし、1927（昭和2）年には日蓄が英米コロムビアの傘下に入り、日本コロムビア蓄音器会社が設立される。このように外資系レコード会社が次々と設立され、制作を開始するにしたがい、ニッポーレコードの勢力も衰えを隠せなかった。約14年間に亘り、「純国産」をキャッチフレーズに活動を展開してきたニッポーレコードであったが、1935（昭和10）年11月タイヘイレコードに吸収合併される。新会社の大日本蓄音器を設立したが、その後、大日本蓄音器もキングレコードの傘下となり併合され、「ニッポーレコード」の名称は消滅するのである。

4.3 博覧会とニッソーレコード

4.3では、近代日本の博覧会とニッソーレコードの関連について整理する。

1922（大正11）年、「平和記念東京博覧会」が東京・上野で開催された。「第一次世界大戦が終結し、平和を祝福する意図で開催されたこの博覧会は、それまでの殖産興業的な展示方法とは異なり、文化国家日本を謳いあげたところに大きな特色があった」²⁰。ニッソーレコードはこの博覧会の活動写真館において、録音風景やレコード製作の様相を活動写真機によって撮影している。

『ニッソータイムス』1922年4月号によると、自動車から降り立った「日本の美声妓大阪南地力松」が録音室にてラッパ管の前に正座し、三味線を構えて『鶯緑江節』を歌い始める。無事録音された蠟原盤は電燈室へ運ばれ、一定の行程を経て銅原版に変化させ、さらにこの原版によってレコードが精製される。これは、レコード製作過程の一部始終を活動写真機で実写するという、一種の公開パフォーマンスである。完成したレコードは専務・森下辰之助の居室にて再生された。つまり、観客の目の前で、歌手のレコーディングからレコード盤が完成する全ての工程を披露し、撮影したのである。

このような撮影を行った前提として、「従来蓄音器製造は絶対極秘に附せられ何人と雖も観ることを許さなかつた為め、如何にして音譜（レコード）が製造されるか…を知らなかつた」²¹と述べている。そこで、来場する観客がレコード産業に興味を持つことを目指し、行程を公開した。しかし、最大の目的は「芸術の趣味から出現したツバメ印は日本人によって経営され、日本の技術によって製作」²²されている事実を内外に知らしめることであった。

博覧会という近代産業の発展を見せつける場で、ニッソーレコード最大のキャッチフレーズ「純国産レコード」の実態を大々的に披露し、活動写真機で撮影する。それはニッソーレコードの極めて高い技術を、他の大手レコード会社に周知させる目的もあったと思われる。

1925（大正14）年には東京市の人口を抜き、211万人の日本最大の都市となった大阪市と大阪毎日新聞の15000号発行達成を記念して「大大阪記念博覧会」が開催された。天王寺公園と大阪城を会場として、入場者数は約190万人にのぼる大規模な博覧会であった。本館の「趣味と娯楽の大阪」コーナーでは、「中心出品を賛助した日東蓄音機会社」²³を始め、俳諧堂、大理石写真、桑田商会など¹⁰

商店がケース内の陳列に協力した。ニッソーレコードがどのようなものを陳列したかは記録に残っていない。しかし、この時期はまだ蓄音機の製造は行なっていないため、レコード盤を中心に陳列したことが予想される。このコーナーの主任委員・入江来布は「現代生活に基礎を置いて計画」²⁴したとされ、ニッソーレコードの商品も大正末期の現代生活に欠かせないものであったと捉えられる。

また、1925年に開かれた「天理教祖40年祭記念博覧会 - 絵葉書 - 2」²⁵には「ニッソーレコード」という広告文字が丹波市町本通大アーチに刻まれている。このように巨大アーチによる宣伝広告は当時のニッソーレコードの精力的な商業活動をうかがわせる。

4.4 委嘱によるレコード制作

4.4では、ニッソーレコードへの委嘱により制作されたレコードについて整理する。東京国立文化財研究所所蔵の義太夫レコード約4000枚を調査した佐藤道子は、委嘱によるレコード制作について、以下のように述べている。

次に特色としてあげられるものに、ニッソーレコードIb様式の盤がある。この様式の盤には、すべて鴻池家御委嘱と記入があり、大阪財閥鴻池家の委嘱によって特に製作されたことが明らかである。素人てんぐが、病嵩じて吹込むのと異なり、本流義太夫に連続多面の本格的吹込みをさせているのは、義太夫の盛な土地での金持の大げさな遊びとも見られる反面、一部特殊階級の好みに頼らねばならなかった企業側の弱点を示していることとは出来ないだろうか。(佐藤1966:361)(下線部筆者)

上記の見解は、愛好する義太夫に私財を投じる資産家一族、そして、資産家に委嘱せざるを得ない純国産レコード会社の実情を示唆している。

鴻池家の10代目・鴻池善右衛門(1841-1920)は「幕末、幕府からの御用金調達命令に応じ、大阪の豪商にも働きかけた。維新政府からも戦費調達を命じられるとともに、為替会社創設事業に従事。資金回収不能となりながらも鴻池銀行(後の三和-UFJ銀行)を創設」²⁶した人物である。数々の動乱を乗り越え、大阪財界の雄となった。「鴻池の名は大阪名物の一となり、三井と相並んで天下の二大

名家と称せられ²⁷た。財閥の鴻池家にとっては、レコード会社に義太夫のレコードを委嘱することなど、たわいもない道楽だったのだろう。

渡辺は鴻池家委嘱によるレコードについて、次のように述べている。

これらはレコード番号がつけてられておらず、カタログにも掲載されていないようであるから、市販されたものとは一応区別されるが、それでも、これまでに述べてきたような、顧客とのつながりをことのほか大切にする形で事業展開をしてきている様子を見ると、とりわけ出資者に名を連ねている地元財界の人々を中心にした顧客層の要求が、作られるレコードの内容をかなり左右していたであろうことは推測に難くない。(渡辺2002:205-206)(下線部筆者)

「鴻池家御委嘱」と印字されたレーベルにはレコード番号の記載がなく、レコード目録にも掲載されていないという。ニッソーレコードが財閥である顧客のニーズに最大限応える形でレコード制作を行なっていたとしたら、大衆芸能、伝統芸能などレコーディングするジャンルにも影響を与えていただろう。

前述したが、本稿で取り上げた八重山民謡のレコード全てに、レコード番号の記載がない。さらに、レコード目録にも記述が見当たらない。レコード番号と目録に記載がないという2つの点は、「鴻池家御委嘱」レコードと共通している。関西在住の沖縄・八重山出身者が出資して八重山民謡レコードを制作させたのか。それとも、八重山在住で経済的に裕福な個人や一族が何かの伝手を頼りに、八重山民謡のレコード化をニッソーレコードに依頼したのか。現時点において、その詳細は不明である。

八重山民謡のレコードは、1.3でプライベート盤のレーベルであることが確認されている。プライベート盤とは、個人や会社、学校など各種団体の依頼によりレコード会社が制作を代行したものである。岡田は「これらの特別盤は、カタログから除外されているので、どんなものがあるのか実物を手にするまでまったくわからない」(岡田1993:109)と述べている。

さらに、大正～昭和初期に地元八重山で発行されていた『先島新聞』『八重山新報』『先島朝日新聞』『八重山民報』を調査したが、ニッソーレコードの広告は掲載されていなかった。これだけ大量のレコードを制作したにも拘らず、地元新

聞に宣伝広告が掲載されていない。

一方、1934年に日本コロムビアが発売した沖縄・八重山民謡のレコードは、八重山出身の歌手を中心とした広告²⁸が地元の各種新聞に10数回に亘り掲載されている。商業目的で制作されたレコードであるため、地元八重山の人々に宣伝するのは当然のことだろう。ニッソーレコードはプライベート盤であるがゆえに、メディアに宣伝広告を出さなかったと考えるのが妥当である。

あくまでも推測の域を出ないが、以上の点を加味すると、個人や一族の委嘱によって八重山民謡のレコードが制作された可能性は非常に高いと思われる。

表4 ニッソーレコード(日東蓄音器)年表 (作成:高橋美樹)

西暦	元号	ニッソーレコード
1920	大正9	3月20日,日東蓄音器株式会社(ニッソーレコード)が大阪住吉神社前に設立
1921	大正10	2月,ニッソーの工場へ女性の見学者600名が訪問,社内を見学
		4月,第1回新譜として47種のレコードを発売。レーベルは燕(ツバメ)印
		10月,『日東タイムス』創刊
1922	大正11	『ニッソータイムス』2巻4号発売,自社レコード総目録付(300点以上)
		3.10-7.31 平和記念東京博覧会にて活動写真館で人気芸者・力松の録音風景を映写
		当時の販売数:日蓄15万枚/ニッソー12万枚
		4月29日,日蓄は大阪市内の小売店120軒に「ニッソーの燕印レコードを売る店には日蓄の鷺印レコード並に蓄音器を供給しない」と申し渡す
		5月,大阪蓄音器同業組合「今回の日蓄の宣言は蓄音器界を攪乱し延いては斯界の発達を阻碍し,組合規定に違反する」
		5月下旬,日蓄は東京の間屋10軒に「ツバメ印を取り扱はないようにと厳命し,契約書まで取った」
		日蓄はニッソーを強敵と見て早速併合を画策するが失敗
		8月5日,豊竹古靱太夫《堀川猿回し》全段をレコード化,古靱太夫公演会を開催
11月14日「第4回日東演芸会」開催		

1923	大正12	録音嫌いで知られる清元延壽太夫に試験録音をきかせ説得、録音することを承諾させた
		6月,東京音楽学校の外国人教師ウィリー・バルダスがベートーヴェン《月光》発売
		新橋の芸者・駒彌が三味線伴奏で歌った中山晋平《恋は命よ》発売
		8月31日,東京少女歌劇《藤六の人形》録音のため来阪,「東京少女歌劇大会」開催
		日蓄とニッソーの対立は9月1日の関東大震災が収束させた。日蓄,東京蓄,帝国蓄は本社機能を神戸に移し,川崎工場をはじめ傘下各社の復興に全力あげる
1924	大正13	日本交響管絃団(指揮:山田耕筰)関西公演の折りに《モリスダンス》《かっぽれ》初録音
		杵屋佐吉「三絃童謡」1924年から翌年にかけて数枚発売
1925	大正14	1月,ピアニスト澤田柳吉,ベートーヴェン《月光》発売
		「天理教祖40年祭記念博覧会」丹波市主催,絵葉書に「ニッソーレコードの広告」
1926	大正15	8月,河合ダンス(芸妓たちの舞踊団)のレコード発売。メンバー4名のシロホン合奏録音
		11月,長時間レコード4種発売。義太夫「熊谷陣屋」豊竹古靱太夫 他
1927	昭和2	ニッソーが大正天皇奉悼レコードを大阪朝日新聞社に寄贈
		工場の労働者数:51人
1929	昭和4	流行歌・歌謡曲の人气が定着する昭和4,5年頃から,ニッソーにひところの勢いなくなる
		『ニッソータイムス』1929年3月号,本文16ページに目録30ページ以上を数える
1930	昭和5	1月「西部戦線異状なし」をレコード化。レコード戦線は波乱含みの異状を呈す
		工場の労働者数:39人
1931	昭和6	『ニッソータイムス』1931年3月号,B5からB6判に変わり,新譜の目録抜粋,全20ページ
1933	昭和8	工場の労働者数:31人
		『ニッソータイムス』1933年の号,新譜情報と抜粋目録のみ

1935	昭和10	10月,日本クリスタル蓄音器はタイヘイやニッターと合併
		11月,ニッターはタイヘイレコード(太平蓄音器)に吸収合併。新会社名は大日本蓄音器。レーベルはツバメ印で存続
		廉価盤 タイヘイ(1円20銭,1円,80銭,70銭),ニッター(1円50銭,1円20銭,1円)他
1936	昭和11	工場の労働者数:統計からニッターの名が消える
1942	昭和17	2月,講談社(キング・レコード部)は大日本蓄音器を買収し併合
1950	昭和25	大日本蓄音器はキングレコードから独立、社名をタイヘイレコードに改称
1952	昭和27	タイヘイレコードが日本マーキュリーに改称 米マーキュリーと業務契約

5 まとめ

八重山民謡レコードのレーベルや音源の分析を通して、以下の点が明らかになった。

- ・八重山民謡のレコードは、プライベート盤のレーベルである。
- ・レコード①~⑩とⅠが制作された後に、レコード(A)は再プレスされた。
- ・同一ジャンル名が記された茶色のレーベルよりも、表裏に異なるジャンル名が記された紫色のレーベルの方がプレスの時期が遅い。
- ・レコード制作は「初回録音 再プレス1回目 再プレス2回目」という変遷を描いている。
- ・仲本政子や松竹加武多の遺族によると、レコードは大正15年に録音された。
- ・伴奏楽器としては46曲が三線を使用し、《崎山ゆんた》《子守歌》はピアノ伴奏、《ジラバ》《ふさぎ野ゆんた》は無伴奏であった。
- ・男女の交互唱が13曲もあり、八重山諸島における歌唱スタイルの特徴を表している。

機関誌『ニッタータイムス』の分析を通して、以下の点が明らかになった。

- ・義太夫、俚謡、端唄、小唄、落語、浪花節など、日本の伝統芸能や大衆芸能に重点を置いている。洋楽は独奏、オーケストラ、管楽及ラップ、独唱などが録音されたが、全体における割合は極めて少ない。
- ・昭和9年当時は大阪の日東蓄音器株式会社を拠点に、札幌から福岡まで全国

に4つの営業所と1つの配給所を設立し、販路を拡大していた。

新聞広告の調査を通して、以下の点が明らかになった。

- ・新譜の広告は『朝日新聞』『読売新聞』などに大々的に掲載していた。広告には商標のツバメ印と「純国産」というキャッチフレーズを盛り込んだ。外資系レコード会社の傘下ではなく、独立した会社であることを強調した。
- ・『朝日新聞』には1922年～1934年まで合計240件の広告を掲載した。広告件数では、1931（昭和6）年と1934（昭和9）が42件と最も多い。
- ・広告は、大正～昭和初期に八重山諸島で発行された『先島新聞』『八重山新報』『先島朝日新聞』『八重山民報』に掲載されていない。

今回の調査で不明な点は以下の通りである。今後の課題としたい。

- ・レコード番号。
- ・ニッソーレコードにレコード制作を依頼した個人または一族の特定。
- ・なぜニッソーレコードが八重山民謡を録音したのが、その動機と理由。
- ・人々が八重山民謡レコードを聴いていた場とその方法。
- ・海外移民として旅立った八重山出身者のコミュニティに、八重山民謡のレコードが流通していたかがどうか、その有無。

ニッソーレコードは「純国産レコード」であることに誇りを持ち、日本や上方の伝統芸能を精力的にレコーディングし、発展させたシンボリック的存在である。

1920（大正9）年から1935（昭和10）年までのレコード業界において、東京の外資系レコード会社と拮抗しつつも、日本人による経営力と技術力を守り続けたレコード会社であった。

ニッソーレコードで制作された八重山民謡のレコードは、商業的な成功を目的としないプライベート盤だからこそ、制作されたのではないかと考えられる。その理由の第1点目として、八重山の人々が日常的に歌い、親しんでいる民謡のレパートリーを大量に録音している。第2点目として、地元八重山で名の通っていた歌い手にレコーディングさせている。

プライベート盤は、依頼した個人や一族が制作費のほとんどを提供するのが一

般的である。八重山民謡のレコードは本社のある大阪で録音した可能性が高い。もしそれが事実なら、八重山諸島から大阪までの交通費や宿泊費のほぼすべてを依頼者が負担したはずである。沖縄県にはニッソーレコードの営業所も配給所もなく、そのまた辺境の八重山の民謡を商業レコードとして制作するには、財政的なりリスクが極めて高い。利益を度外視したプライベート盤だからこそ、30枚以上のレコードを制作できたのである。

昭和初期の沖縄において、蓄音器でレコードを聴くことができた人はごく僅かではなかっただろうか。それでもなお、複数の機関に八重山民謡のレコードが寄贈・寄託されている事実は、八重山の人々へ確かにその歌声が届いていたことを示している。さらに、時を隔てて2回もプレス製造されている点も、レコードという録音メディアを通して、八重山民謡を聴く人々のニーズが高かったことを表している。

1934（昭和9）年にはニッソーレコードと拮抗していた日本コロムビアが、沖縄・八重山民謡の商業レコードを発売する。日本コロムビアの営業部長が事前調査のため八重山へ来島するほど、沖縄の御当地ソング作りに力を注いでいた。今回取り上げた八重山民謡レコードは「ヒット曲をつくる」ことを目的としたレコード産業の前段階として、近代沖縄の録音文化史に位置づけられる。

謝辞

本論をまとめるにあたり、沖縄県公文書館、石垣市立八重山博物館、石垣市立図書館において貴重な文献・音源資料を御提供いただいた。また、石垣市教育委員会文化課長（当時）・大田静男氏には多くの御助言、御教示をいただいた。ここに記して感謝申し上げたい。

付記

なお、本論は沖縄・八重山調査に際して、国際日本文化研究センターの助成を得ている。

註

- 1 記事の一部は以下の通り。1915年8月30日「琉歌吹き込みを聞く」『琉球新報』琉球新報社。1915年9月27日「琉歌レコード到着期」『琉球新報』琉球新報社。
- 2 1927年沖縄出身の普久原朝喜が大阪市で設立した沖縄音楽専門のレコード会社。丸福レコードの活動については(高橋2007)参照。
- 3 高橋美樹、2007、発表要旨「沖縄音楽レコード化にみるコロムビア・レコードの戦略 1930年代SP盤録音を事例に」『民俗音楽研究』32号、日本民俗音楽学会、pp.52-53参照。
- 4 「レコード」『日本大百科全書』参照。
- 5 富川英子氏が沖縄県公文書館に寄託した経緯は(沖縄タイムス2000.3.5:21)参照。
- 6 松竹章雄氏がレコードを発見した経緯は(沖縄タイムス1999.11.19:29)参照。
- 7 レコード盤の中央に貼付されたラベル・シートのこと。転じて、そこに表記されたレコード会社そのものを指して、レーベルと呼ぶようになった。最近ではレコード会社としての機能(製造、流通)を持たず、原盤制作のみを行なう会社もレーベルと呼ぶことが多い。1987『音楽用語事典』リットーミュージック、p.290参照。
- 8 筆者による大田静男氏へのインタビュー。実施日は2008年3月4日。
- 9 ラッパに向かって音声を吹込む方式。この集音型ラッパ吹込みは機械式録音といわれ、集音した音の音圧で針を振動させ、溝をワックスに刻んでいく方式。皆川弘至、1998『音楽録音芸術概論』音楽之友社 p.21参照。
- 10 音の振動をいったん電気エネルギーにしてから機械変換する電気録音方式。皆川弘至、1998『音楽録音芸術概論』音楽之友社 p.21参照。
- 11 2006「4 - 2 一覧表」『日本伝統音楽に関する歴史的音源の発掘と資料化』『日本伝統音楽資料集成』6巻、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、p.9。
- 12 波照間永吉、1983「ジラバ」『沖縄大百科事典』中巻、p.458参照。
- 13 外間守善「コンタ」『日本大百科全書』
- 14 新城亘氏に御教示いただいた。
- 15 筆者による仲本の孫・世山澄子氏へのインタビュー。実施日は2008年3月9日。
- 16 1922『日本紳士録』交詢社、p.299。
- 17 『昭和9年度 ニットーレコード総目録』日東蓄音器株式会社。
- 18 1987「大正13年の戎橋」『写真集おおさか100年』サンケイ新聞社、p.25参照。

- 19 前掲18、p.25。
- 20 山路勝彦、2008『近代日本の植民地博覧会』風響社、p.110。
- 21 1922年4月「平和博覧会の活動写真館に於て」『ニッタータイムス』p.7。
- 22 前掲21
- 23 大阪毎日新聞社編、1925『大大阪記念博覧会誌』p.222。
- 24 前掲23、pp.216-217。
- 25 この絵葉書は乃村工藝社のHP「博覧会資料閲覧・検索ガイド」で確認できる。
<http://www.nomurakougei.co.jp/expo/kensaku.php>
- 26 2004『阪神ゆかりの50人』神戸新聞社、p.9。
- 27 1913『大阪現代人名辞書』文明社、p.706。
- 28 広告の一例は以下の通り。1935年9月30日「広告 コロムビア 蓄音器とレコード
販売 八重山民謡 琉球民謡 / 仲本政商店」『先島朝日新聞』p.4。

参考文献

- 生明俊雄、2007「日本レコード産業の生成期の牽引車 = 日本蓄音器商会の特質と役割」『広島経済大学経済研究論集』30巻1・2号、pp.1-16。
- 新垣重雄、2004年3月13日「近代八重山の島唄研究 ユンタ・ジラバから節歌へ」『第144回沖縄・八重山文化研究会』発表資料。
- 大田静男、1993『八重山の芸能』ひるぎ社。
- 岡田則夫、1991年2月号「第5回 続・蒐集奇談」『レコード・コレクターズ』
- 岡田則夫、1991年3月号「第6回 続・蒐集奇談」『レコード・コレクターズ』
- 岡田則夫、1991年10月号「第13回 続・蒐集奇談」『レコード・コレクターズ』
- 岡田則夫、1993年5月号「第30回 続・蒐集奇談」『レコード・コレクターズ』
- 菊池清麿、2003「昭和SPレコード歌謡産業史 その黎明期における一考察」『メディア史研究』14号、ゆまに書房、メディア史研究会、pp.78-97。
- 倉田喜弘、1992『日本レコード文化史』東京書籍。
- 佐藤道子、1966「邦楽レコードの変遷 義太夫節を中心として」東京国立文化財研究所編『東京国立文化財研究所蔵 音盤目録 I』東京国立文化財研究所、pp.347-366。
- 鈴木啓三、1980「大阪のレコード企業」『大阪春秋』8巻3号、pp.128-130。
- 高橋美樹、2007「沖縄音楽レコード制作における 媒介者 としての普久原朝喜

1920-40年代・丸福レコードの実践を通して」『ポピュラー音楽研究』10号、日本ポピュラー音楽学会、pp.58-79。

高橋美樹、近刊『沖縄ポピュラー音楽史』ひつじ書房。

橋爪節也、2005『モダン心斎橋コレクション』国書刊行会。

毛利真人、2007「大大阪行進曲 流行歌に描かれた昭和初期の大阪」橋爪節也編『大大阪イメージ』創元社、pp.94-110。

山崎整、1999「連載 関西発レコード120年」『神戸新聞』

渡辺裕、2001年8月「大阪発・純国産レコードの盛衰：ニッソーレコードの場合」『レコード芸術』音楽之友社、pp.319-321。

渡辺裕、2002「地場産業としてのレコード会社 ニッソーレコードと大阪の音楽文化」『日本文化モダン・ラブソディー』春秋社、pp.189-218。

1921年10月「日東タイムス」『日東時報』日東蓄音機株式会社、pp.1-32。

1999年11月19日「大正期に民謡録音 小浜出身の松竹加武多さん 亡き父の歌声に章雄さんうっとり」『沖縄タイムス』p.29。

2000年3月5日「大正、昭和の八重山民謡22枚 県公文書館に保存 石垣市の富川さん懐かしのレコード託す」『沖縄タイムス』p.21。